外国人の日本語研究
－ツュンベリーとポリワーノフ－

福　田　益　和

(一)

極東の一小国日本（倭国）の存在については近隣の朝鮮半島・中国大陸の人々の間では夙に知られて居り、周知の、いわゆる『魏志』の「倭人伝」（正確には、『三国志・魏志』巻30の東夷伝の中の倭人の条）には倭人諸国の名が明記され、その国情についてかなり具体的な記述がみられる。その記事の中には、人名・国名・固有名など約60余の倭人語と思われる語が含まれている。それ等の語は仮借の方によって表記されているが、表語文字としての漢字の性格からその語形・音節構造等の分析は困難を極め、倭人語の実態に迫る上での障害となっている。しかし、近年、中国漢字音の歴史的研究が進展し、あわせて日本側の後代の文献にみられる「万葉仮名」に用いられた漢字音の研究も盛んであって、そうした基礎的研究を踏まえて「倭人語」に用いられた漢字音を分析して行くと上代日本語以前の弥生式時代（３Ｃ）のコトバ（倭人語＝日本祖語）の一端が浮かび上がってくるのである。

以下、例を示し、藤堂明保氏推定の漢字音を上古漢語・中古漢語について併記する。

・卑狗　　Pieg－Kug（上古）(注1)
　　Piĕ－Kəu（中古）
・卑弥呼　　Pieg－miĕr－hag（上古）
　　Piĕ－miĕ－ho　（中古）
・伊都　　・Iər－tag（上古）
　　・Ii－to（中古）

これは日本祖語への遡源を考える上で刮目に値するといわねばならない。

「倭人伝」記載の「倭人語」がどのようなルートを経て蒐集され、編者陳寿によって伝えられたのか詳細なことは明らかではない。かりに、陳寿が魚豢の『魏略』に依拠して記したとしても同じことである。遣隋使・遣唐使等が洛陽・長安へ旅した時よりずっと以前のことであり、『宋書』の「倭王武の上表文」で知られる雄略天皇の時代より二〇〇年以上も前のことのコトバ（倭人語＝日本祖語）である。

邪馬台国女王卑弥呼が魏に使者（大夫難升米等）を遣わした（景初二年［238］六月）という、その使者・大夫難升米なるものの素姓が明らかでなく、よってその話すコトバ（倭人語）の系統がはっきりしないのである。しかし、当時の中国の人々は、極東の一小国のコトバに好奇の眼差をもって耳をかたむけたことであろう。すなわち、これは外国人による日本語観察の先蹤といわねばならない。

3Cごろの「倭人語」については、系統論の立場からみれば、いわゆるアルタイ系語族の北方的性格に染まっていない、南方的、それもアウストロネシア語族の特徴を有する言葉であると考えられる。この点については既に言及したこともあり、小稿でも後述する予定である。(注2)

爾来、1700有余年、「倭人語」は「日本語」（『旧唐書』に、はじめて「日本」名が記される）へと連綿としてつづき、今にいたっているのである。

（二）

外国人による日本語観察は、政治的・外交的・文化的・地理的等の諸要因によって、中国や朝鮮半島の人々を中心に絶えずなされてきたが、それ等の観察がまとまった形をなして後世に残されるようになったのは15C以降と思われる。出色のものとしては、

- 日本館訳語（1492〜1549、編者未詳）
- 日本寄語（1523、薛俊、「日本国考略」所収「寄語略」）
- 日本一鑑（1565〜1566、鄭舜功）
- 日本風土記（1592、侯継高？）
- 弘治五年朝鮮板伊呂波（1492）
- 海東諸国記（1501、申叔舟、中で「琉球国」の語音翻訳）
- 捷解新語（1676、康遇聖）

これ等は、16C〜17Cのころ、中国や朝鮮の人々によって編まれたもので、その動機・目的は多様ではあるが、中には周到な日本語（琉球語）観察、というより一歩踏み込んで日本語研究の域まで達したとみられるものもある。

こうしたアジアの人々の日本語観察・研究がつづく中で、新たに登場するのが西洋の人々、キリシタンによる日本語研究である。太平洋の荒波を凌ぎ、キリスト教伝道の情熱に燃えたポルトガルのパードレ達は、布教の手段としての日本語観察、更には音韻・文法等の各分野にわたっての研究に専心した。彼等は素養とするラテン語文典の体系をベースとして日本語を研究し著作として残した。ロドリゲスの『日本大文典』は特に著名である。(注3)

こうして、日本語の研究は、東洋の人々、西洋の人々、すなわち世界の人々によって関心の対象となって進められるようになった。

西洋の人々の日本語研究は、まず「キリシタン語学」の名のとおり、キリシタンによってはじめられ、みるべき成果をあげたのであるが、幕府の「禁教会」(1612)、鎖国政策（1633）等によって大打撃をうけ、当初のような意欲的研究が頓挫し、表面的には活躍の場をなくしてしまった感がある。

西欧の情報は長崎出島を唯一の窓口として、オランダ東印度会社のあるバタビア（現在のインドネシア共和国の首都ジャカルタ）を中継地点としてやってくる貿易船のもたらすものが主なものとなった。その船にのって長崎へやってくる人々はオランダ人だけでなくヨーロッパ各国の人々に及ぶが、小稿ではその一人、スウェーデンのツュンベリーに焦点をあて、その日本語研究の一端を垣間見る。オランダ人による日本語研究は「キリシタン語学」に対比されるものを残さなかったが、そうした状況下でツュンベリーの仕事は注目されてよいと思われる。それともう一人、ツュンベリーに遅れること130余年、近代日本の大正初年、同じ長崎に上陸したロシア人ポリワーノフにも目を向け、その日本語研究を述べる。

ツュンベリーはスウェーデンより、ポリワーノフはロシアより、時代こそ違え、いずれも長崎に上陸し、その周辺をまず研究のフィールドとして定め、それを足がかりとして調査研究をはじめた。

両人の国籍・経歴・専門分野・来日の目的等それぞれに異なるが、その違いが研究の特徴にも対照的に映し出され、一方、にもかかわらず両者の同根性もあらわれていて興味深い。

（三）－(1)

カール・ペーター・ツュンベリー（Carl Peter Thunberg, 1743～1828）が長崎に来たのは、1775（安永４）年８月14日で、出島商館付医官として初めて日本の地を踏んだのである。彼は33歳、スウェーデン気鋭の植物学者で、有名なリンネの高弟である。(帰国後、リンネの後を襲いウプサラ大学の教授となる)。

ツュンベリーは故国のウプサラを1770年８月12日に出発しているから、日本の長崎にたどりつくまで５年を要している。その間、各地に立寄り、オランダ東印度会社のあるインドネシアのジャワ島にも上陸している。

日本滞在は約１年４ヶ月、長崎出航（安永５年12月２日）の日まで、長崎の地はもちろんのこと、日本の各地を訪れ、専門の植物採集（彼は800余種の標本を採集した

とのこと）や医師として活躍した。一方、彼の興味は未知の日本語にも及び、当初日本人の通訳等から日本語を学習したが、当時の状況として、

「日本政府はできる限りヨーロッパ人が日本語を覚えることを妨げている。それはヨーロッパ人には日本のことを直接知らせまいとするからである」（「日本紀行」三）

と彼自身が指摘するような厳しい環境下にあったためにその目的を十分に果たすことは困難であった。そこで彼の日本語学習法として新たに登場したのが、いかにも植物学者らしく、自分から直接日本人の話すナマの声（音声）を聴取り、それを「採集する」という方法であった。ツュンベリーは長崎近郊に植物採集に出かけた折、そこに住む人々のコトバに耳をかたむけ、それを採集し記録することに力を注いだ。その過程で日本語に対する観察も深まって行った。この方法は長崎周辺に限らず、安永5（1776）年、江戸参府の折にもつづけられ往還の所々で、また江戸滞在中にあってもやむことはなかった。彼にあっては、専門の植物採集と同様に未知の日本語に対する強い関心から、その「日本語」をまずは「採集」することからはじまり、それをもとにして研究心がいよいよ強まって行ったと考えられる。

こうして成ったのが『瑞日対訳語彙集』（以下、「語彙集」と略称）と『日本語観察』（以下、「観察」と略称）である。(注4)

(注5)彼はアジアの言語に深い関心を抱いていたごとくで、ジャヴァ島でも「ジャヴァ語彙集」を作成している。ツュンベリーは、既述の通りリンネの高弟で、植物学を専門とする自然科学者であって言語学専攻の学者ではない。しかし、科学者特有の、探究心・好奇心によって未知の、極東の一小国の言語に注目したものと考えられる。彼の言語観察の方法は土地の人々の会話を基底にし、それを聴取り記録することから出発したのであるが、これを語学的視座からみれば、いくつかの問題点を内包していたようである。例えば、インフォーマント選定の問題、転写法（文字の選定）、規範性の問題、位相差の問題など。フィールドワークにおいて基本的に検討しておくべきことがらが十全であったかどうかの問題である。彼の残したものが、「語彙集」や「観察」であって「文典」等という体系的著作にならなかったのはその一面を裏書しているように思われる。

ツュンベリーの日本語研究で注目されるのは当時（18C末）の肥筑方言語彙（その中には長崎方言語彙も含まれる）と目されるものが顕著であるということである。それ等の方言語彙は、当時の国内文献記載の語彙について、それ等一つ一つの語形の認定に役立つことが期待される。その一点からみても貴重な成果であると認められる。

また、「観察」の中では敬語法の実態などもその一面をよく示して居り、中央語との比較対照をする上でも参考になる。彼が地域生活語彙に対してどのような認識をもっていたか必ずしも鮮明とはいえないが、それ等を丹念に記録し、中央語との対照、ある時は併記法による語形の対比についても配慮しているところからみると、生活に根ざした、地域（特にここでは長崎の地）特有の匂いをもっている語彙を中心に集めて行こうという意図がうかがわれるのである。

以下、その語彙の中からいくつかをとりあげ、若干の考察をして行くことにする。

（三）－(2)

肥筑方言語彙と考えられるものを、「語彙集」・「観察」から摘記し、左に原語（スウェーデン語）、右に、それに対する日本語を記し、（　）内に出典を記す。

①すらごと（嘘）

Ljuga－Suragoto, usso（語彙集）

ツュンベリーの採録した「すらごと」は「うそ」と併記されているように、その語義は明らかである。その中央語形「そらごと」は古く『竹取物語』、また中世の語源辞書『名語記』など多くの文献にみえる。

「すらごと」は音韻的には中央語形「そらごと」との母音交替/O/～/U/の事象の一つとして考えることができる。soragoto～suragoto、これはNobasu (延ばす)～Nubasu等の交替例と同類のものと認められる。

「すらごと」を同時代の文献に徴してみると、長崎の人、野口文竜の著した『長崎歳時記』（1797・寛政9）に「うそを　すらごと」、また『筑紫紀行』（吉田重房、1802・享和2）に「虚言をすらごと」、『長崎万歳』（高宮栄斎、1849～52）に「すらごと　空言」（巻3、長崎訛笑歌八景の条）とみえる。

外国資料でも、中国の翁広平撰『吾妻鏡補』（1814）所収「海外奇談国語解」に、「假話　式拉谷多」とある。「式拉谷多」は、いわゆる音訳漢字による日本語表記(注6)であり、同時代の漢字音によって、「スラゴト」とよめるものである。「海外奇談国語解」（略して、「国語解」とも）記載の日本語は長崎方言語彙を中心にあつめてあるので、上記諸文献の性格からみて、「すらごと」は長崎方言特有語彙の一つと目される。ツュンベリーが長崎近郊において「採集」した語彙の一つであることは確実である。

現在、この「すらごと」及びその一類の語（「すら」、「しら」等を語基とするもの－すらごと・すらごつ・しらごつ等－）は、長崎だけではなく、福岡・佐賀・熊本など九州の各県にも分布している。

②おかっつあん（他家の妻）

Fru－Okatsa, niobo（語彙集）、Okatʃa, niobo, omai no okat ʃan（観察）、

「語彙集」では、Okatsa（おかっつあ）を第一にあげ、次に、niobo（女房）を併記する。一方、「観察」では、omai no okatʃan（お前のおかっつあん）の句単位のものもあげている。

「おかっつあ（ん）」は、「観察」に「Omaino」とある通り、「他家の妻」を指して呼ぶ時に用いられたものと解される。既述の『長崎歳時記』にも、「人の女房をおかつさん」とある。『吾妻鏡補』（国語解）にも「妻、烏甲山」（烏甲山は、オカッサンを表記した音訳漢字）とあげている。

この語については、「母」を意味する「おかさま」の訛ったものとする古賀十二郎氏の説もあるが、一方で、他家の妻を呼ぶ中央語形「おかた（御方）」に接尾辞「さま（ん）」[注7]のついた「おかたさま（ん）」に由来するとも考えられる。接尾辞連結の際、破擦音化して「おかっつま（ん）」に転じたものと考えられる。

なお、ツュンベリーの表記では、Okatsa, Okatʃan 両形が併存しているが、前者のOkatsaについては文献的に確証が得られない。日本語特殊拍の撥音（N）を正確にききとれない事例もあって、あるいは、撥音としてききとっても表記上ユレが生じて、無表記（ゼロ表記）の体裁をとったのであろう。不審のところである。

この語は他県にも分布し、「おかっさま」（鹿児島・大分）、「おかっさん」（熊本県）等の形で用いられている。

③うまくち（接吻）

Kyss－　Umakutji, Kwutjisu（語彙集）

Kyssa－　Umakutji suru（語彙集）

　　Umakutji ʃuru（観察）

「語彙集」では、Umakutji（うまくち）を第一にあげ次に、Kwutjisu（口す）を併記している。「口す」は、国内文献によれば、「この間にちょっと口せう口せう」（近松徳叟『伊勢音頭恋寝刃』1796）とある「口す」（動詞「口為」）と考えられる。あるいは、中央語形「くちすふ」（口吸ふ）が、当時ウ段の長音となり、それが長音短呼の事象によって短音化していたものを「Kwutjisu」（口す）とききとり記録したものと考えられる。

中央語の「口（を）吸ふ」やその名詞形「口吸ひ」は、「ただおしあゆのくちをのみぞすふ」（土佐日記）、「吸　クチスフ　両口相交也」（色葉字類抄）等と古くから用いられ、性愛の表現であった。一方、西欧のキス（Kyss, Kissなど）は、敬意・親

愛の表現としても用いられるから語義的にズレが生じてくる。幕末明治初の日本人が、「くちつけ」（和語系）・「接吻」（字音語系）・「キ（ッ）ス」（洋語系）（注8）などと訳に苦慮したのはそのためであろう。

ツュンベリーが長崎に上陸した当時は上記の語が存在しなかったか、一般化していなかったため、長崎方言語彙「うまくち」を第一にかかげ、次に、中央語出自「口す」を併記したものと考えられる。なお、「うまくち」は、「子供がうまがって口を鳴らす」、「談話中に舌をうちならす」の意に用いる地方もあるから、語源的には、口づけの際の音に由来するものと推測される。

④ごご（娘）

Dotter－Musme, gogo（語彙集）

第一に、中央語「むすめ（娘）」Musmeを記し、次に「ごご」gogoをあげている。

「ごご」は、同時代の文献『物類称呼』（越谷吾山、1775）に「小児…同所（長崎）にてごごと云は小女の事他」とある。古賀十二郎氏が、「他家の娘を尊敬して云ふ」（長崎市史風俗編、附録「長崎方言集覧」）と指摘されるのはそれである。「ごご」は、日向（飫肥）、天草（富岡）、「ごうごう」の形で、山口県（阿武郡）、「ごごじょ」の形で、長崎県（西彼杵郡）などに分布している。

この他、長崎方言語彙と考えられるものは多いが、その数例を注記なしにあげておくことにする。

⑤いどる（すわる）

Sitta pa matter－Idoru（語彙集）

⑥ばば（兄）

Broder, äldste broder－Kiodai, babo, ani（語彙集）

⑦いげ（棘）

Tagg, törne－Ige（語彙集）

⑧はわく（掃く）

Torka af.－Nogou, hawaku（語彙集）

⑨ふいきん（手巾）

At torka talrikar－Fuiking（語彙集）

⑩ないゆる（地震揺る）

Lamhet－Nai juru（語彙集）

⑪はか（小刀）

Knif, bordknif－Haka, faka, fotjo（語彙集）

次に、音韻・文法事項に関することで注目されることがらを述べてみたい。

(i) 語末母音の無声化現象にかかわる事項、

semekf～∫emeku（狭く）

torr'～toru（取る）

abramu∫s'～abramu∫i（油虫）　（以上「観察」）

語末狭母音/i/、/u/が無声化する事例を挙げ有声母音と対照している。「語彙集」でも、

Sömn, sofva－Nur, nuru.（寝る）

と、有声・無声の両形を併記したものや、

Bedrägeri－Damas koto（だますこと）

Måttstock－Sjakf（尺）, monosass（物差）

のように、Damas,（だます）monosass（物差）と語末狭母音Uの無声化と思われる例がみられる。

(ii) 合拗音と思われる事例、

Chirurgus－Gekwa（外科）

Kittel－Jakwang（薬かん）

Kopparkittel－Tetjakwang（鉄薬かん）

Nyårsdag－Guansits（元日）

（以上「語彙集」）

(iii) f・h両子音併存の状況

子音fからhへの交替の事象は音韻史の上からは、古くは例えば16C末の『日本風土記』（『日本考』）にみえる音訳漢字の分析からもうかがうことができる。別稿で論及したようにハ行子音を写すのに、非母（軽唇音全清）・奉母（軽唇音全濁）・敷母（軽唇音次清）に属する文字（f～）と暁母（喉音次清）に属する文字（h～）とが併存している事実がある。ただ、その交替事象は近世に入っても急速に進んだわけではなく、ツュンベリーの耳にした日本語でも、唇音・喉音いずれも聴き取れたようで、それが、両音併記の結果となったものと考えられる。その併存の事例を次に示しておきたい。(注9)

Knif, bordknif－Haka, faka, fotjo（小刀、包丁）

Aska－Hai, fai, finohai（灰、火の灰）

Kind－Hogeta, fo, fogeta（穴げた）

（以上「語彙集」）

faguru～haguru（剝ぐる）, faʃjimaru～haʃjimaru（始まる）
fakama～hakama（袴）

（以上「観察」）

文法事項では、

(i) ノ助詞の主格用法（独立単文の中で）

Regna, det regnar　－ Ame no fiuru（雨の降る）
Snö, snöa　－ Juki, juki no fiuru（雨の降る）
Ebb　－ Suwo nofiuru（潮の干る）

（以上「語彙集」）

(ii) 動詞二段・一段活用の併存例

Öpen － Akuru（開くる）
Öpen － Akeru（開ける）　（以上「語彙集」）

(iii) 形容詞イ語尾・カ語尾併存例

Djup － Fukai, f'kaka（深い、深か）
Fin － Komakannna, Komaina, Komaka, Komai（小まか、い）
Smal － Semaka, Sebaka, Semai（狭か、い）
Svag － Jowaka, Jowai（弱か、い）

（以上「語彙集」）

(iv) 敬語

Omai no okatʃan faraimasʃur.（お前のおかっさんはらいまする）
Gokigin jo guʃerrimaʃka?（ごきげんよう、ございますか）
jo guʃerrimasʃur.（よう、ござりまする）
Nagasaki wa do guʃerrimasʃurka?（長崎は、どうござりまするか）
Kekkono tokoro deguʃerrimasʃur.（結構のところで、ござりまする）
Wataks mionitji jarrimasʃu（私、明日、やりまっしゅ）　（観察）

丁寧の助動詞「まする」・「ござりまする」がさかんに使われ、「～masʃu」（まっしゅ）などは中で注目される。

（四）－(1)

ツュンベリーに遅れること１Ｃ有余。1914（大正３）年５月、長崎の港についた一人のロシア人がいた。名は、エヴゲーニ・ドミトリヴィッチ・ポリワーノフ（Evgenij Dmitrievich Polivanov）（1891－1938）。彼は当時23歳。気鋭の言語学者であ

り、露日協会の援助によって来日したのである。時はあたかも第一次世界大戦（1914～18）勃発の激動の時代であり、世界全体に暗雲ただよう時でもあった。

ポリワーノフは、1891年、ロシアの一都市スモレンスク（Smolensk）で生をうけたが、この年はロシアにとって自衛策としての「露仏同盟」の締結があり、独墺の脅威に対しようとした。また、ロシアでも資本主義の発達にともない、そこから惹起された矛盾の中で工場労働者は呻吟し、この気運が社会民主党の結成（1898）、さらにはロシア10月革命（1917）となって行く。

さて、長崎の地にて日本上陸の第一歩をしるしたポリワーノフは、まず長崎近郊の西彼杵郡三重村（現、長崎市三重町）を言語調査研究のフィールドとして定め、この地の「枡（ます）屋旅館」に寄宿して約半年間（5月～11月）方言調査を中心に研究をすすめた。ツュンベリーが植物学者であり、言語研究の分野においてはいわば素人であったのに対して、ポリワーノフは言語研究を専門とする学究であった。彼はサンクト・ペテルブルグ大学文学部入学（1908）、翌年には、同大学の東洋語学校日本語科に籍を置いている。1912年、同大学を卒業（21歳）、比較言語学研究室に残り、クルトネ（Baudouin de Courtenay）の指導をうけ論文作成に専心、その成果が彼の第一論文「日本語・琉球語音声比較概観」となって公表された。この論文の中では、日琉両語の、母音対応の事実や二重母音、祖語[注11]の子音体系等々、両語の音声・音韻に関する精細な考察がなされている。この論文で比較されている「日本語」とは東京方言のことであり、「琉球語」とは首里方言をさしている。

東京方言については、同大学日本語科の日本人講師黒野義文の発音するナマの声を耳にしていたはずであるが、首里方言についてはチェンバレン[注12]（B.H.Chamberlain）の著書によったものと推測される。

彼は日琉両語[注13]の音声表記の方法として、国際音声学協会の字母に依拠しながらも、恩師シチェルバ（L.V. Shcherba）の創意をもとり入れていてユニークである。この表記法が長崎の三重村での言語調査などにも用いられ有効に働くことになった。

来日の前年（1913）、ポリワーノフは作家・ジャーナリストでもあった母エカテリーナ（Ekaterina Jakovlevna）に死別し、傷心のあまり自分の目標を失いそうになったが、この俊秀はそれを克服して不幸を飛躍の踏み台とすべく、当時のロシアにおける日本研究のメッカ、ペテルブルグから一路研究のフィールド日本をめざしたのである。

彼が寄宿した「枡屋旅館」は浜辺に臨む二階家で、一階は家族、二階が客室で4部屋あった。その一室に腰をすえて、長崎三重村の方言、特に音声調査を軸として精力

的に研究をすすめたのである。インフォーマントの役を務めた人達には、岩エイさん（故人）等、当時の三重村の人たち、調査を助けた人達には徳永伊佐吉さん（故人、当時東京高商〔現一橋大学〕の学生で夏休み帰省中、エイさんの兄)、三重小学校の久松先生等がいた。

ポリワーノフは方言調査の中で音声調査に力を注ぎ、それを記録するのに、ユニークな方法によった。例えば、口蓋化の〔ʃ〕を、ś、同様に、c〔ts〕, ʒ〔dz〕に対してć, ʒ́, またはk', n' など、口蓋化・非口蓋化の対応に意を用いた。また、アクセントにも注目し、その内実が音楽的アクセント（高さアクセントの意）であることを喝破している。三重村方言アクセントの二つのタイプ（現在、平山輝男氏のいわゆる「長崎音調」[二型音調])、語末音節において声が下がるもの（尻低型)、声が高まるもの（尻高型）を区別し、前者（尻低型）については、音節の前にL 印をつける。後者（尻高型）については音節の前に「 印をつけることで区別したのである。また、両タイプにユレがあると認められる場合は、両者を併記している。

言語研究を専門としなかったツュンベリーは、その方言語彙の「採集」にあたって、アクセントに関しては記述がなく、彼のアクセント観を知ることができないのは残念である。彼の母語スウェーデン語は、強さアクセントとともに高さアクセントもあると聞く。その点彼のアクセント観を知りたいものである。

ポリワーノフはその出発点において、日琉両語の音声比較を研究テーマにしたことを思えば、三重村でアクセントに注目したのは当然のことであった。(彼は若いころピアニストを夢みていた程の、天与の鋭い音楽的才能をもっていたが、交通事故で左手を損傷、言語学に転じたといわれる)

彼は方言調査をすすめるうち、三重に残された民話（昔話）や風俗にも興味をもち、それ等も方言資料の一つとして記録し残しておいた。『日本方言学資料　長崎県西彼杵郡三重村の方言』(1915、ペトログラード）がそれである。

こうして「三重村」の名はヨーロッパ言語学徒の脳裏にきざみこまれることになった。上記の資料には、民話 6 、風俗 7 を収めている。民話は、「舌切り雀の話」（çitakirisuʒu menohana「śi）・「花咲爺」(hanasaka「ʒ́i:）など。風俗は、「三重の子供」(mijeLnokoroLmo, mijenokoroLmo）・「十四日のもぐらうちの話」（ʒu:jokkaLno moguraući「no hana「śi）など。

民話のうち「浦島太郎」(uraśimata「ro: ）の冒頭の部分を参考まであげておきたい。

uraśimata˥ro:

1. muka˩śi muka˩śi so˩no ma˩ta muka˩śi arutoko˥re: uraśimata˥ro: ttè ju:˩te {hataćibakka˩i: / hataći:bakka˩i} na˥i go:˥gi: ucukuçi˥ka otoko˥no ottaga˩na.

2. aru˥çi iʷocui˩g'a: ita˩te kai:jottai˥ba koroŋ˩ga ippuki˥no gamme˥ba ɸutcukamaićo˩tte nabuijottato˥ba mi˥te gu:ra˥śu: omo:˥te koro˩me: ʑem˥ba kui˩te so˩no gamme˥ba moro:˩te u˥mi: nug'a:˥te ja˩tta.

3. soçitai˩ba nisan˥ći çiteka˩ra uraśima˥ga {iʷocui˩g'a: / iʷocui˩ja:} itaćottai˩ba ɸuto˥kka gamme˥ga jatteki˩te mo:˩śi mo:˩śi taro:˩saŋ konai˥ra: {waśiga-i˥no / waśiga-inokorom˥ba} {korom˩ba} {tacuke˥te kui˩te / tacuketekui˥te} {ariga˥to: goʒaima˥su / arigato:goʒaima˥su} wataku[śa: {waśiroŋ˥ga toŋsama˥no (ママ) / waśiroŋ˥ga toŋsama˥no} r'u:gu:samaka[ra omaisama˥ba {muk'a:[ni / muk'a:˩g'a:}

〈吉町義雄「音声の研究」VI所収本文による〉

(四) —(2)

ポリワーノフは先に述べた徳永伊佐吉氏の協力を得て、上京の折東京大学の心理学実験室で音調曲線の分析を試み、また更に、土佐・京都・東京等でも調査研究をすすめ、日本語のアクセントの内実に一つの光を灯したのである。三重村の方言アクセントについては、「長崎県三重村方言における二つの音楽的アクセント」(1928、レニングラード)で詳しく言及されている。彼によれば、三重村方言にみられる二つのタイプ(尻低型・尻高型)(注17)にそれぞれ属する語は、その派生形(名詞変化や動詞活用などの語形)においても同じ型に属することを明らかにしている。

〈尻低型の語とその変化形〉

kaLu (買ウ)　ko: Lta (買ッタ)

kawaLŋ (買ワナイ)　ko: te: Lta (買ッテオイタ)

ko: te: tatoLba (買ッテオイタモノヲ)

〈尻高型の語とその変化形〉

ha˥na (花)　hana˥ga (花ガ)

han'a⌈:（花ニハ）　hana:⌈re（花デ）

hanaka⌈ra（花カラ）

彼はさらに青森県津軽の方言、秋田市の方言、熊本の方言などにも研究を広げ、これ等によって得られた知見をもとに現代日本語の子音カテゴリー（対立する子音グループ）を示した。

例えば、

○長い（重複）子音と短い子音

pp　tt　kk　ss ～ p　t　k　s

○有声・無声の子音

b　d　g　z ～ p　t　k　s

○「軟い」（口蓋化または口蓋的）子音と「硬い」（非口蓋化）子音

p'　b'　m'　c'　ʒ'　n'　k'　ŋ'　s'　r'　ç'

～p　b　m　t　d　n　k　g　ŋ　r　h

ポリワーノフは日本語研究を出発点としてその独自の方法によって研究を深めて行ったが、日本語以外の、中国語、さらにはアルタイ諸語（トルコ語・ウズベク語など）、マライ諸語（アウストロネシア語族）などアジアの言語を中心にその研究領域を広めて行った。

その中で注目すべきは、日本語とマライ諸語との親縁関係に着目したことである。

これまで日本語の系統を論ずる時、北方説すなわちアルタイ系言語との親縁関係が強調され、ラムステット（G.J.Ramstedt）による遡源研究、アルタイ祖語の想定、母音子音の復元等示唆的な研究成果が公表されている。しかし、一方で比較言語学における、同系の指標の一つとされる音韻対応の法則が今一つ十分に証明されていないのは、そこに何らかの系統関係を証明する上での問題点が内包されていると推測される。そうした意味でも、南方説（特にアウストロネシア語族）に改めて注意を向ける必要があると考えられる。

いわゆる南方説は、その比較の方法論においてこれまで多くの批判をうけてきたが、その中にあって、泉井久之助氏の「南島語共通態」による音韻措定、村山七郎氏による南島祖語、原始日本語の想定など十分傾聴すべき研究成果もある。現在、改めてポリワーノフの説に傾聴すべき時が来ているのである。

ポリワーノフは、日本語と南島語（アウストロネシア語族）の類似点として、

(i) 語彙形態素の典型は2音節、形式形態素は1音節

(ii) 接頭辞が存在する（アルタイ諸語は接尾辞のみ）

(iii)日本語の形態の最古層における（完全および不完全）重複の形態的機能

などを挙げている。そして、強さアクセントではない、高さアクセントが両者にあることも指摘している。かくして、南島語の祖形をもとに日本語の語彙について語源解釈をしながら系統論に及び、日本語は南島語を基層として、後に北方系の言語と混合した形で形成されたものとみたのである。

現在の研究では、日本語はアウストロネシア語族のうち西部語派（ヘスペロネシア語派…マレー語、インドネシア語、スンダ語など）との親縁関係が深いと考えられているが、その西部語派では今、閉音節になっているものもあり、音韻構造の違いを指摘する人もいる。しかし、同じアウストロネシア語族の中で、東部語派（オセアニア語派〜特にポリネシア系諸言語）の言語は語末子音を失い開音節化している。これは、本来、閉音節を保っていた南島祖語が、東部語派では開音節となり、西部語派では閉音節を保持しているものもあるということである。

例示すると、

南島祖語*(注18) inum（飲む）

〈東部語派〉

サモア語　inu（飲む）　inumia（飲まれる）

〈西部語派〉

インドネシア語　minum（飲む）

スンダ語　nginum（飲む）

上記の事実をもとにすると、日本列島に縄文期渡来したと思われる南島語族の民の音韻構造に閉音節の存在を考えることは決して根拠のないことではない。

日本語の開音節化はそれ以後のものとも考えられる。東部語派の諸語が後に開音節化したのと同様に。

ポリワーノフは南島語だけではなく、北方系アルタイ諸語についても深い関心をよせ研究をしている。「原始トルコ語の長母音の問題」では、原始トルコ語の長母音の再構を試み、ウズベク語の方言調査をして、「タシケント方言の音構造」(注19)を公表している。(注20)

いずれも示唆に富む研究で、言語学上輝かしい業績を残した。しかし、天才は世に容れられぬといわれる通り、彼の無垢の魂は俗塵の中で誤解、反発を招き、人間的・社会的に数々の不利益をうけることになった。革命政権の下、ペトログラード大学教授となり、同年（1919）共産党に入党、しかし、このころから同僚と不和を生じ、大学を辞してモスクワへ。コミンテルンの極東部の要職についたが（1921）、研究機関

での仕事はなかった。数ヶ月後、中央アジアウズベク共和国のタシケントの中央アジア大学教授となって赴任、1926年、モスクワへ帰るが、ここで、マル（N.Ia.Marr）の「新言語学説」を痛烈に批判した。そのためモスクワでの職を失い、再びウズベキスタンへ（1929）。1934年には、フルンゼ（キルギス共和国）の、キルギーズ文化建設大学教授になっていたが、３年後の1937年、反ソ活動の理由で投獄され、翌38年１月25日獄死。スターリンの粛清工作下での悲劇であった。享年47歳、惜しみても余りある死であった。没後25年、1963年、ソ連科学アカデミー言語研究所の請願により、ようやく彼の名誉回復はなされたのである。

（五）

長崎に入港し日本の地の第一歩を踏み出した外国人学者は多いが、小稿では、スウェーデンから来たツュンベリーとロシアからやって来たポリワーノフの二人についてその日本語研究の大要を眺めてきた。

両者はそれぞれ独自の判断により、その調査研究のフィールドをまず長崎（と、その近郊）に定め、当地の人々のコトバを聴き取るところからはじめて行った点は同じであった。しかし、二人は、その経歴・専門分野・研究目的等のちがいにより研究内容においてユニークな点が多く対比的に考察することに一つの意義が見いだせるものと思う。

ツュンベリーは、出島商館付医官としてやって来たが、実は有名なリンネの高弟で、気鋭の植物学者であった。そのため、彼の日本語研究は、まさに彼のいう「観察」（OBSERVATIONES）であって、「観察」にとどまったということもできよう。彼の専門とする未知の植物の採集、その標本の作成、その方法を未知の言語「日本語」にも用いたものと言ってもよい。彼の「瑞日対訳語彙集」は、いわば、日本語の標本的な性格を帯びていたと思われる。そのような標本を作成すること自体に彼自身大きな意義を認めていたものと考えられる。彼の「日本語観察」には、音韻・文法等の諸分野についていくつかの知見が述べられているが、それ等の知見をまとめ体系化して行くことには積極的ではなかったようである。しかし、彼の記述した言語事実は当時の肥筑方言、特に長崎方言の一斑を鮮明に浮彫りにして居り、日本語研究史の上でも貴重なものと認められる。

一方、ポリワーノフは、ツュンベリーに遅れること１Ｃ余、当初から言語研究の目的で同じ長崎に入港した。彼は言語学を専門とする有為の学究であり、長崎近郊の三重村に腰をすえて、その地のコトバを丹念に記録しテクストを作成した。その音声転

写法に独特の方法を用い、アクセントにも配慮し、それを克明に記述、ユレがあると認められる場合は両型を併記するなどの精緻な態度で臨んだのであった。こうした彼の言語観察は、日本各地の方言調査を経て日本語の音楽的アクセント（高さアクセント）の本質にせまることになった。また、日本語の系統についても示唆的な説（北方・南方混合説）を提示し、日本語という極東の一言語について、世界の諸言語の中での位置づけを試みようとしたことも特記すべきであろう。

ツュンベリーは、帰国後リンネの後を襲いウプサラ大学の教授として活躍、1828年に没、享年85歳、天寿を全うした。ポリワーノフは祖国の革命下、反ソ活動の理由でとらえられ47歳で獄死するという、悲劇的生涯を閉じたのである。

〔注〕

(1) 藤堂明保『漢字の語源研究』（学燈社）、『学研漢和大字典』（学習研究社）

(2) 福田益和「日本語における南島語的要素」（『国文研究』40号）

(3) 『日本大文典』（長崎版　1604～1613）
『日本小文典』（マカオ版　1620）も後に刊行

(4) 『1770～1779年にわたるヨーロッパ、アフリカ、アジア紀行』（RESA UTI EUROPA. AFRICA. ASIA FÖRRÄTTAD ÅREN 1770～1779）の第3巻「日本紀行」（1791）「瑞日語彙」については、『文学研究』（57輯）に吉町義雄氏があげている。

(5) 『日本語観察』（OBSERVATIONES IN LINGVAM JAPONICAM）（1792）〈ウプサラ王室科学協会新紀要第5巻〉『方言』（9－3）に、吉町義雄氏が本文を掲げている。

(6) 静嘉堂文庫本による。

(7) 『長崎市史・風俗篇』附録「長崎方言集覧」（古賀十二郎編）

(8) 『改正増補和英語林集成』（ヘボン、1886）に、「Kuchitsuke クチツケ　接吻」「Seppun　セップン」『西国立志編』（1871、中村正直訳）に、「キス　クチヲホウニツケルコト」

(9) 福田益和『日本考』小考－巻四を中心に－（「香椎潟」38）

(10) ポリワーノフは11月帰国するが、翌年（1915）、再び日本を訪れている。

(11) 「日本語、琉球語音声比較概観」（帝室ロシア考古学協会東洋部報）23～Ⅰ、Ⅱ

(12) 黒野義文は東京外国語学校出身、同校助教授（ロシア語担当）、1888年、ペテルブルグ大学の日本語科講師、以後1916年まで在任。

(13) B.H.Chamberlain "Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Lauguage" (1895)

(14) 筆者が訪れた1989（平成元）年11月21日「ポリさん」（三重の人々は、この愛称で親しんだとのこと）をよく知る岩エイさんなどすでになく、御子息の岩謹吾氏に会っていろいろとうかがった。なお、「枡屋旅館」も今は廃業している。

(15) 平山輝男『九州方言音調の研究』

(16) 吉町義雄「音声の研究」VI所収（1937）

(17) 『東洋語大学用の言語学概論』（1928）

(18) 『言語学大辞典』（三省堂）、「インドネシア語派」の項

(19) 「原始トルコ語の長母音の問題について」（ロシア科学アカデミー報告）1927

(20) 「タシケント方言の音構造」（科学と教育）1922

〔参考文献〕

(1) 『日本語研究』（E.D.ポリワーノフ著、村山七郎編訳）昭51.7　弘文堂

(2) "E.D.POLIVANOV Selected Works Articles on General Linguistics" A.A.LEONTÉV など。

上記のうち、村山七郎氏の業績に負うところが大きい。